

## ディドロのブーシェ論 ——1759年の『サロン』から1765年の『サロン』を中心に

胤森由梨

### 序

ドニ・ディドロ (Denis Diderot 1713-1784) は友人グリムが主宰する『文藝通信』にサロンについての美術批評を書いた。ディドロのサロン評は1759年から81年にかけて一年おきに執筆され、合計9つものサロン評が存在する。本稿は、『サロン』のとりわけブーシェ評 (1759年から1765年) を取り上げる。

フランソワ・ブーシェ (François Boucher 1703-1770) は、アカデミーの会長になった、ロココ時代を代表する画家である。ブーシェの優雅に着飾った男女を主題とする絵画は、社交界の人々に広く愛好され、芸術家にも大きな影響を与えた。『サロン』の中でディドロはブーシェをほとんど一貫して批判する。ブーシェの絵画はディドロの自然主義的<sup>(1)</sup> 絵画観に反し、その批判はブーシェが自然の観察を行わずに、空想によって作品を制作する手法に向けられている。ブーシェ評に関する先行研究では、全般的な傾向としてディドロの自然主義的観点から美学的問題に至る理論形成をめぐる考察が豊富になされている (ロジキン [2013]、デュフロ [2013]、デモリ [2008]) が一方でディドロが唯一高く評価しているブーシェの《キリスト降誕》(Nativité) の批評の中で見られる道徳的批判についての考察はあまり詳細になされていない<sup>(2)</sup>。たとえば、ロジキンは《キリスト降誕》で用いられる空想的な色彩に美德と結びつく真実らしさはないとはいえ、それが結果として絵画的技術を向上させ、ディドロは作品自体を容認していると論じる。また、デュフロもディドロがこの批評の中でブーシェの絵画的技術を高く評価していたことを明らかにしているが、ディドロがこの作品に向けた道徳的批判には触れていない。すなわち、先行研究において、ディドロが唯一高く評価し

たブーシェの《キリスト降誕》という作品について、技術的な評価を取り上げるに終始し、実は、ディドロが道徳的観点からこの作品を批判している点は明らかになっていない。

そこで本稿では、こうした先行研究を受けて、まず、第一章ではブーシェの絵画がディドロの自然主義的絵画観にいかにかに反し、どのような批判がなされていたのかを対象物と色彩に分けて考察する。第二章では、ディドロが自然主義的絵画観に加えて、道徳的な観点からもブーシェを批判していることを指摘する。

## 第一章 ディドロの自然主義的絵画観

ディドロのブーシェ評は1759年に始まり、ロジキンの指摘にあるように、批評内容は作品や作家との接触を通じて、内容はより精緻なものになり、美学的な領域に進出していく。第一章では、ディドロが自然主義の立場から対象物や色彩といった絵画を構成する諸要素にどのように向き合い、ブーシェの描く作品に対してどのような批判を行っていたのかを考察する。

### 第一節 対象物についての批判

ディドロは1761年の『サロン』で、ブーシェが描いた《田園画と風景画》(*Pastorales et Paysages*) という作品群<sup>(3)</sup>に対して以下のように述べている。

何という色！ 何という多様さ！ 何と対象と着想が豊富であることか！ この男は真実を除いた全てを持っている。あなたの好みに合わないような構成部分から切り離されている構成部分は存在しない。構成部分全てを集めてもあなたを魅了する。けれども人々は自問するのである。こんなに優雅で豪華な衣服をまとった羊飼いを見たことがあるだろうか。今までどんな主題が同じ空間に、田園いっぱい、橋のアーチの下に、住居から遠く離れたところに、女性や男性、子供、雄牛や雌牛、羊や犬、藁の束、水、火、ランプ、香炉、手つき壺、炊事鍋を寄せ

集めただろうか。描かれているこの魅力的な女性については、これほどちゃんと服を着ていて、手入れの行きとどいた享乐的な女性は何をしているのだろうか？ 遊んだり、眠ったりしている子供たちは彼らの子供だろうか？ 頭の上でひっくりかえそうとしている火を持つ男は配偶者なのだろうか？ 火のついた炭をどうしたいのだろうか？ それをどこで手に入れたのだろうか？ 調和のとれていない対象物の何と騒がしいことか！<sup>(4)</sup>

このように、ディドロはさまざまな対象物から構成されるブーシェの作品が人々を引き付け、魅了すると述べているが、その理由はただ絵画的技術が優れているからではない。人々は絵画的技術とは別に、田園画の宗教画的要素が装飾的に配置されていることに魅了されているのだ。しかし、ディドロはブーシェの絵画に技量や着想の豊かさを認めつつも、田園画が世俗化することから生じる主題の非合理性を指摘する。すなわち、ディドロはブーシェが、一つの画面にさまざまな主題を織り交ぜて描いている点、羊飼いが羊飼いには見えぬほど豪華な衣装をまとっている点、田園画という主題にあまり関係のない対象物を不条理に配置している点を批判している。ブーシェはこのように、田園画とみせかけて、キリスト教的な対象物を装飾的にあちこちに配置することで、田園画を宗教画のように見せているのである。この絵が宗教主題を扱っているとわかる理由は、エジプト避難の構図がとられていること、また羊飼いの女性と子供に赤と青というキリスト教の信仰と受肉を示す色が選択されているからである。こうした宗教的な対象物に加えて、ブーシェは田園画に関係のない対象物として手つき壺や炊事鍋といった対象物を散りばめている。また、ロジキンによれば、画面右上にある、山羊の角を持つ牧人が花でできた綱で飾られた壺は『サロン』に記述はないものの、同年に出品されたブーシェの神話画の《サテュロスに見つめられて眠るバッカスの巫女》(*Bacchantes endormies observées par des satyres*) の画面左上に同様の壺を確認することができる<sup>(5)</sup>。このように、ブーシェは画面を構成する際に、主題とは関係のない対象物を装飾的に配置している。そのため、配置される対象物は主題を強めるというよりもむしろ装飾的効果を高める性格が強く、かえって主題をわかりにくくさせているのである。

ディドロは主題を十分に表現するために、絵画を構成する諸要素は有機的な関係を結ばなければならないと考えていた。というのも、ディドロは絵画の模範は自然であると繰り返し主張し、『百科全書』の「構成 (composition)」の項においては、絵画における構成とは、自然に存する動物の体が有機的構造を備えているように、諸部分を一つにまとめることであると定義しているからである<sup>(6)</sup>。このことから、ディドロのブーシェの描く対象物に関する批判は、主題と描かれている対象物に有機的な関係が結ばれていることを認めることができない点に向けられていると推察することができる。ディドロはブーシェの用いる色彩についても同様の批判を行っているため次節で考察したい。

## 第二節 色彩についての批判

第一節では、ブーシェのとりわけ対象物についてのディドロの批判を考察した。ディドロは自然主義的絵画観に基づいて、色彩についてもブーシェを批判する。1763年の『サロン』のブーシェ評序文で、ディドロは《幼きイエスの眠り》(*Le sommeil de l'enfant Jesus*)<sup>(7)</sup>に用いられた色彩について、その過剰な色彩表現を化学者の起こす化学反応にたとえて架空の議論を行っている。

色彩はあなたの知り合いの化学者に次のことを命じてみてはどうだろうか。硝酸カリウムを使って銅の爆発を起こすように言ってみなさい。そうすればブーシェの絵画にある色彩を見るだろう。これはリモージュの作り出す美しい七宝のようである。もしあなたが画家に、「ブーシェ先生、色調はどこから取ってきたのですか。」とたずねたら、彼はこう答えるだろう。「私の頭の中からだよ。」——「しかし間違っています。」——「そうかもしれないが私は真実であるかどうか気にしたことはないのだよ。私は神話上の出来事を空想的な絵筆によって仕上げているにすぎないのだよ。あなたは何をご存知か。タボル山<sup>(8)</sup>の光や樂園の光がおそらくこんな風だと知っているのか。また、夜に天使たちがあなたのもとを訪ねてきたことがあるのか。」——「いいえ。」——「私にもそんなことが起こったことはない。だからこそ私は自然に全くモデルが存在しないものに関しては、自分

がよいと思うように描くのだ」<sup>(9)</sup>。

ディドロはこのように、ブーシェの絵画で用いられる色彩の輝きが過剰であることを化学者の起こす実験で生み出される色彩にたとえている。

第一節で述べたように、ディドロはあくまでも絵画とは、自然を模倣すべきであると主張した。ここで繰り上げられる架空の議論では、自然の観察を行わずに想像力に真実を求めるブーシェが、ディドロの立場と反する人物であるということを対話という形で強調している。むしろ、ディドロにとって対象物と色彩は絵画を一つの作品として成立させるために有機的な関係を持って構成されなければならない。よってディドロが批判する、ブーシェの輝きすぎている色彩とは、部分ばかりを際立たせ、全体としての調和を乱すことへの批判なのである。

## 第二章 ディドロの自然主義と共存する道徳的問題

第一章で考察した通り、ディドロは自然主義という立場から一貫してブーシェの装飾的に画面を構成し、諸部分に有機的な関係を持たない手法を批判している。しかしディドロは一方でブーシェの絵画的技術を高く評価しており、ブーシェを大画家の一人として認めてもいた。本章では、ディドロがブーシェに対して絵画的技術を認めつつも、なぜ許容しなかったのかという問題を、道徳的な観点から考察する。

ブーシェ評には一点のみディドロが高く評価する作品があり、それは1759年の『サロン』に執筆された《キリスト降誕》という作品である。ディドロはこの批評の中でブーシェの想像力の豊かさを認め、そこに独創性があることを示している。

以下が《キリスト降誕》についての批評の引用である。

私は彩色法が間違っていることを認める。輝きすぎているのだ。そして子供は赤色である。このような主題で天蓋付きの優雅なベッドほどこっけいなものはない。しかしそれにしても聖母マリアはとても美しく、愛情にあふれていて

(amoureuse)、魅力的である。そしてこの穂を手に取り、聖母マリアの背にもたれかかる、聖ヨハネほど繊細でいたずらな様子を想像するのは困難である。(中略) 私はこの絵を所有することを遺憾に思いはしないだろう。あなたは私の家に来るたびにこの絵のことを悪く言うだろうが、それでもあなたはこの絵を見るだろう(10)。

第一章でみてきたように、ディドロは自然主義の立場から色彩が自然とはあまりにもかけ離れていることを批判し、また対象物の不条理さという観点からは、宗教画という主題にそぐわない天蓋付の豪華なベッドを批判している。しかし、一方で聖ヨハネにみられるブーシェの想像力の豊かさを高く評価し、その点にブーシェの独創性を認めている。さらに彼は、その作品には鑑賞者が悪口を言いながらも、引き付けられてしまうような力があることを示している。

ただし、ディドロは鑑賞者を引き付ける力が、絵画的技術の巧みさによるものであると同時に官能性によるものであると考え、そのためブーシェの作品を無批判に許容してはならないと留保を加えている。以下は1761年のブーシェ評の引用である。

人々はブーシェのように光と闇の芸術を理解していない。彼の芸術は二種類の人間(つまり社交界の人々と芸術家)の関心をひくために作られる。優雅さやうわべだけの優しさや現実離れした慇懃さや愛嬌、趣味、淀みのなさ(facilité)、多様性、輝き、化粧を施した肌の色(carnations fardées)そして放蕩は取るに足りない男性(petites-mâîtres)や女性(petites femmes)、若者、社交界の人々、真の趣味、真実、正しい観念、芸術の厳格さについて無縁の群集の心をとらえるに違いない。彼らはどのようにしてブーシェの目につく放蕩さや輝き、ポンポンや乳房、尻、毒舌をはねつけるのだろうか。そしてこの男(ブーシェ)が絵画の困難さをどの点まで乗り越えたのかを見る芸術家にとってはほとんど彼らにしかわからない才能(mérite)がすべてであり、彼の前にひざまずくのである。ブーシェは彼らの神なのだ(11)。

ブーシェの想像力をもとに作品を制作する手法は、芸術についての真の趣味、真実、正しい観念、芸術の厳格さを持たない鑑賞者にとっては以下の理由で有害なものになる。その理由は、鑑賞者は主題よりも際立ってしまっている放蕩さや乳房、尻といった表層的な事柄に引き付けられてしまうために、より本質的な問題である、主題がなんであるかといった考察が行われなからである。

こうした注意をディドロは鑑賞者にとどまらず、芸術家にも向けている。先の引用にあるようにブーシェは芸術家たちに、彼らにしか理解できないような才能によって神とあがめられている。ディドロは1763年のブーシェ評でブーシェを模倣する生徒がどのような模倣を行っていたのかを以下のように論じる。

この男（ブーシェ）は絵画を学ぶ生徒にとっての癌である。生徒は絵筆の使い方やパレットの持ち方を知ったとたんに子供を花飾りでつなげることやぼってりとした真っ赤なおしりを描くこと、そしてあらゆる種のばかげたことに身を投げ出すことで心がいっぱいになる。その工夫とはいくら模範に熱心さや独創性があった、優しくて魔術的であったとしても許されるものではない<sup>(12)</sup>。

当時ブーシェの画家としての人気は高く、その作風を模倣することに熱中する学生は大勢いた。確かに、ディドロはブーシェを類まれな才能の持ち主と形容し、ブーシェに他の画家が真似することが出来ない独創性を認めていた。ただしその独創性には絵画技術の巧みさという点でも、官能性という点においても画家を含め、鑑賞者を引き付けるものであった。そのために、ディドロは道徳的な観点から、鑑賞者に絵画の表層的な事柄ばかりを無批判に受容することを危険視し、ブーシェに対しては、人々の関心をひくために絵画を官能的に見せる点を批判しているのである。

## 結論

以上、ディドロのブーシェ評においてディドロが自然主義の立場からどのような批

判を行っていたのかを考察し、絵画的技術の高いブーシェをディドロはなぜ許容しなかったのかという問題を道徳的な観点をもとに考察した。ディドロの批評の根底にあるのは厳格な自然の模倣によって、絵画の中においても自然界にみられるような有機的な関係を持たせることである。ブーシェ評の中ではそれが対象物の不条理さや色彩の間違いとして語られている。しかし一方で、ディドロはブーシェの作風に独創性があることを認めてもいた。ただし、その独創性には官能性が伴っているため、ディドロは道徳的観点から鑑賞者が無批判に作品を受容することに注意を促し、ブーシェに対しては、人々の関心を引くために絵画を官能的に見せる点を批判していたのである。

#### 註

本稿では、以下二つの原典を参照する。引用に際して略号とページ数のみを記した。翻訳はすべて拙訳であるが、1763年の『サロン』の訳は大阪大学で開講されている山上先生の「フランス文学演習」の授業で行った訳を参照した。

一次資料の表記については、Diderot, XIII, *Œuvres complètes*, tom. 13, « Salon de 1759, Salon de 1761, Salon de 1763 », Jean Varloot, Jacques Chouillet, Jean Garagnon (éd.), Paris: Hermann, 1980. を XIII という略号で示した。

(1) 本発表でいう「自然主義」は、広い意味での、自然をあるがままに再現しようとする芸術思想を表すものとする。自然主義の定義に関しては、以下の文献を参照した。『オックスフォード西洋美術辞典』、佐々木英也監修、講談社、1989年。

(2) Stéphane Lojkine, “Peindre en Philosophe, Le pari de la vérité” in *Le Goût de Diderot Greuze, Chardin, Falconet, David*, Paris: Hazan, 2013; Colas Duflo, “Le beau” in *Diderot philosophe*, Champion Classiques, Paris, 2013.

(3) サントーバンのデッサンから1761年にブーシェが6つの作品を出品したことが判明している (ES, p. 119)。

(4) Quelle couleurs ! quelle variété ! quelle richesse d’objets et d’idées ! cet homme a tout, excepté la vérité. Il n’y a aucune partie de ses compositions qui, séparée des autres ne vous plaise ; l’ensemble même vous séduit. On se demande, mais où a-t-on vu des bergers vêtus avec cette élégance et ce luxe ? quel sujet a jamais rassemblé dans un même endroit, en pleine campagne, sous les arches d’un point, loin de toute habitation, des femmes, des hommes, des enfants, des



boeufs, des vaches, des moutons, des chiens, des bottes de paille, de l'eau, du feu, une lanterne, des réchauds, de cruches, des chaudrons ? que fait là cette femme charmante, si bien vêtue, si propore, si voluptueuse ? et ces enfants qui jouent et qui dorment sont-ce les siens ? et cet homme qui porte du feu qu'il va renverser sur sa tête, est-ce son époux ? que veut-il faire de ces charbons allumés ? où les a-t-il pris ? quel tapage d'objets disparates ! (XIII, pp. 221-222.)

(5) Lojkine, *op. cit.*, pp. 103-108.

(6) L'Encyclopédie ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société de gens de lettres, New York, rep. 1969, pp. 772-773.

(7) ロジキンはこの作品が 1759 年の《キリスト降誕》の二作目であると指摘している。  
Lojkine, *op. cit.*, p. 110.

(8) タボル山とは、紀元前 13 世紀にイスラエルが勝利を取めた土地として知られている。

(9) Pour la couleur, ordonnez à votre chimiste de vous faire une détonation ou plutôt déflagration de cuivre par le nitre, et vous la verrez telle qu'elle est dans le tableau de Boucher. C'est celle d'un bel émail de Limoges. Si vous dites au peintre : Mais, Monsieur Boucher, où avez-vous pris ces tons de couleur ? il vous répondra, Dans ma tête... Mais ils sont faux... Cela se peut, et je ne me suis pas soucié d'être vrai. Je peins un événement fabuleux avec un pinceau romanesque. Que savez-vous ? La lumière du Thabor et celle du paradis sont peut-être comme cela ? Avez-vous jamais été visité la nuit par des anges ?... Non... Ni moi non plus, et voilà pourquoi je m'essaie comme il me plaît, dans une chose qui n'a point de modèle en nature... (XIII, p. 355.)

(10) J'avoue que le coloris en est faux ; qu'elle a trop d'éclat ; que l'enfant est de couleur de rose ; qu'il n'y a rien de si ridicule qu'un lit galant en baldaquin dans un sujet pareil ; mais la Vierge est si belle, si amoureuse et si touchante ; il est impossible d'imaginer rien de plus fin ni de plus espiègle que ce petit St Jean couché sur le dos, qui tient un épi. (中略) Je ne serais pas fâché d'avoir ce tableau. Toutes les fois que vous viendriez chez moi, vous en diriez du mal, mais vous le regarderiez. (XIII, pp. 81-82.)

(11) Personne n'entend comme Boucher l'art de la lumière et des ombres. Il est fait pour tourner la tête à deux sortes de gens ; son élégance, sa mignardise, sa galanterie romanesque, sa coquetterie, son goût, sa facilité, son éclat, ses carnations fardées ; sa débauche, doivent captiver les petits-maîtres, les petites femmes, les jeunes gens, les gens du monde, la foule de ceux qui sont étrangers au vrai goût, à la vérité, aux idées justes, à la sévérité de l'art ; comment résisteraient-ils au saillant, au libertinage, à l'éclat, aux pompoms, aux tétons, aux fesses, à l'épigramme de Boucher. Les artistes qui voient jusqu'où cet homme a surmonté les difficultés de la peinture et

pour qui c'est tout que ce mérite qui n'est guère bien connu que d'eux, fléchissent le genou devant lui. C'est leur dieu. (XIII, p. 222.) 括弧内引用者。

(12) Cet homme est la ruine de tous les jeunes élèves en peinture. A peine savent-ils manier le pinceau et tenir la palette, qu'ils se tourmentent à enchaîner des guirlandes d'enfants, à peindre des culs joufflus et vermeils, et à se jeter dans toutes sortes d'extravagances qui ne sont rachetées ni par la chaleur, ni par l'originalité, ni par la gentillesse, ni par la magie de leur modèle. Ils n'en ont que les défauts. (XIII, pp. 356-357.) 括弧内引用者。

#### 作品一覧

ブーシェ 《休息》 (*La Halte*)、1761-1765 年、油彩、画布、208 × 289cm、ボストン美術館。

ブーシェ 《サテュロスに見つめられて眠るバッカスの巫女》 (*Bacchantes endormies observées par des satyres*) 1760 年、油彩、画布、77 × 63cm、個人蔵。

ブーシェ 《幼きイエスの眠り》 (*Le sommeil de l'enfant Jésus*) 1759 年、油彩、画布、118 × 90cm、プーシキン美術館。

#### 参考文献

##### 一次資料

Diderot, *Essais sur la peinture, Salons de 1759, 1761, 1763*, Gita May et Jacques Chouillet (éd.), Paris: Hermann, 1984.

—— *Oeuvres esthétiques*, P. Vernière (éd.), Classiques Garnier, Paris, 1988.

—— *Salon de 1765*, Else Marie Bukdahl et Annette Lorenceau (éd.), Paris: Hermann, 1984.

—— XIII, *Œuvres complètes*, tom. 13, « Salon de 1759, Salon de 1761, Salon de 1763 », Jean Varloot, Jacques Chouillet, Jean Garagnon (éd.), Paris: Hermann, 1980.

##### 参考文献・研究論文

Colas Duflo, “Le beau” in *Diderot philosophe*, Champion Classiques, Paris, 2013.

*The Dictionary of Art*, (ed.) Jane Turner, New York: Grove, 1996.

Jacques Chouillet, *La formation des idées esthétiques de Diderot*, Paris: Armand, 1973.

René Démoris “L’art et la manière Diderot face à Boucher” in *Les Salons Diderot Théorie et écriture*, Pierre Frantz & Elisabeth Lavezzi (dir.), Paris: PUPS, 2008.

Stéphane Lojkine, “Peindre en Philosophe, Le pari de la vérité” in *Le Goût de Diderot Greuze, Chardin, Falconet, David*, Paris: Hazan, 2013.

ディドロのブーシェ論

略年表(\*)

年	ブーシェ	ディドロ
1703	フランソワ・ブーシェ生まれる。	
		ドニ・ディドロ生まれる。(1713)
1723	王立アカデミーでローマ賞を受賞する。	
	27年～31年まで ローマに滞在する。	
1734	ボーヴェのタピスリー工場でデザインを手掛ける	
	王立アカデミーの会員になる	『盲人書簡』を出版する。(1749)
1751	ポンパドゥール夫人の美術教師になる。	『百科全書』第一巻を出版する。(1751)
		『百科全書』第二巻を出版する。(1752)
		『百科全書』第三巻と、『自然の解釈について』を出版する。(1753)
		『百科全書』第五巻を出版する。(1755)
		『百科全書』第六巻を出版する。(1756)
		『百科全書』第七巻を出版する。(1757)
1759	《キリスト降誕》をサロンに出品する。	『サロン』の執筆を始める。ブーシェ評を執筆する。(1759)

ディドロのブーシェ論

1761	《田園画と風景画》をサロンに出品する。	ブーシェ評を執筆する。(1761)
1763	《幼きイエスの眠り》をサロンに出品する	ブーシェ評を執筆する。(1763)
1765	主席宮廷画家になる。	ブーシェ評を執筆する。(1765)
	《カリストを驚かそうとディアナに変身したユピテル》をサロンに出品する。	
	《アンジェリークとメドール》をサロンに出品する。	
	《二つの牧人画》をサロンに出品する。	
	《もう一つの牧人画》をサロンに出品する。	

(\*) 略年表作成にあたって以下の文献を参照した。

中川久定『人類の知的遺産 41 ディドロ』、講談社、1985年。

『ブーシェ・フラゴナール展』、千足伸行監修、印象社、1990年。